



# 表具師

稲崎棟史

店先に掲げられた「大経師」の文字。そこに込められた歴史と誇りを、次の世代へと受け継いでいく。



いなざきむねちか ●  
1937年生まれ。経新堂稲崎表具店5代目。  
1997年、東京都伝統工芸士に認定。  
東京都中央区日本橋浜町 2-48-7



大切にしている言葉は「余慶(よけい)」。『納めたものをお客様に慶んでいただき、その慶びの余りを分けていただけるよう、精進を続けたい』

## 仕事のコツは、真面目であること



詩吟や書道を愛好する棟史さん。こちらは展示会に出品した作品で、表装も自ら仕上げた

### 繊細な技術と力仕事 そして心構えを大切に

経新堂稲崎表具店の店先には、「大経師」と大書された看板が掛けられている。「これは表具職人の筆頭格を表す称号で、名字帯刀と江戸城への出入りが許されていたと聞いております」と話すのは、五代目の稲崎棟史さん。店は天保八年(一八三七)の創業で、元は「元大工町」(現在の日本橋二丁目)に店を構えていた。店内には明治十七年(一八八四)に発行された表具店の番付「東京高名表具唐紙師取組」が飾られており、当時の最高位だった大関に輝いているのが「稲崎新八」だ。稲崎表具店では四代目まで新八を襲名していた。

近代に入り、店は関東大震災と東



明治初期の番付には、大関に「稲崎新八」の文字

京大空襲で二度、焼失。昭和二〇年(一九四五)三月十日の空襲では、当時八歳だった棟史さんは祖母と弟を背負った母とともに劫火の中を逃げ惑った。戦後、店は現在の日本橋浜町に移転。棟史さんは高校卒業と同時に家業に入った。「昔は長男が継ぐのが当たり前の時代でしたから。子どもの頃から父の仕事に付き添っていたので、自然な流れでしたね。でもこの

仕事、一たす一が二になるような単純なものじゃない。先輩職人の手元を見て少しずつ覚えていきました」。自転車の横に荷台を取り付けて、渋谷の坂を上り下りしながら、多摩川沿いの邸宅まで納品に向いたこともある。往復すれば一日がかり。掛け軸や額の表装に加え、屏風やふすま、障子といった建具も手がける表具師の仕事は、繊細な技術を指先に宿す一方で、体力が求められる力仕事でもある。

今よりも日本家屋が多かった昭和時代、ふすまや障子の需要は多く、「忙しいなんてもんじゃない。十二月なんか寝る暇がないよ。商店街全体がそんな感じで、夜十二時頃に銭湯に行くと、湯船は垢でお湯が見えなかった」と笑う。

若い頃、ある料理店に天袋のふす

まを納めたことがある。先方の希望どおりの色で仕上げたにもかかわらず、「どうもしっくりこない」と言われ、やり直すこと十二回。ところが最終的に選ばれたのは、最初に見せた一枚だった。料理店の主人は「本当は最初の色がよかったけれど、どんなに小さな仕事でも細心の注意をはらって向き合うことをお前さんに教えたくて突き返した。十二回分の手間賃はちゃんと払うよ」と話したという。「昔は、そうやってお客さんが鍛えてくれたんですね」と懐かしそうに振り返る。

現在は二人の息子に仕事を託し、そのもとで職人たちが育っている。若い人たちへのメッセージを尋ねると、「どんなに時代が変わろうとも、真面目に生きること。その積み重ねです」と穏やかにほほ笑んだ。